

中勘助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響

木内英実

1. はじめに

中勘助（1885–1965 詩人、夏目漱石に認められた代表作「銀の匙」で著名な作家）は、寺社への断続的な仮寓（1911–1918）と岩波書店の雑誌『思想』編集者であった和辻哲郎との交流を契機に、印度学に関心を抱き、古代インドを舞台とした三部作「提婆達多」（1921）、「犬」（1922）、「菩提樹の蔭」（1929）を創作した。

中は「犬」に登場する地名等の固有名詞読み仮名について 1922 年 2 月 12 日付書簡で和辻に尋ね、1924 年 2 月 14 日と和辻宛書簡では、宇井伯寿に「カーマストラ」入手を依頼した結果を記した。つまり中の印度学知識と印度学文献入手には和辻と宇井が関わっていたことがわかる。

「犬」（初出『思想』岩波書店 1922.4）に関しては、先行論文中「仏教説話系統の作品」（伊藤整、「解説」、『現代日本小説体系』17、河出書房、1951）、「おそらく仏典から材を取ったらしいこの怪奇譚」（杉森久英、「第九随筆文学二、中勘助」、『現代文学総説』、学燈社、1952）、「仏典から取材したもの」（斎藤昌三、「『犬』の性欲描写」、『生活文化』、1953）との言及があるが、依然仏典の出所が解明されていない。

2. 「犬」の時代的背景とその出典の考察

作品冒頭の文章「有名なガーズニーのサルタン・マームードは印度の偶像教徒を迫害し、その財宝を掠略することをもつて畢生の事業として、（1）紀元 1000 年から 1026 年のあひだにすくなくとも十六七回の印度侵入を企てた。（2）いつも十月に首都を發して三ヶ月の不撓の進軍をつゞけたのち内地の最富裕な地方に達する慣ひであつたが、（3）かやうにして印度河から恒河にいたるまでの平原を横行して、市城を陥れ、殿堂偶像を破壊することによつて、彼は『勝利者』『偶像破壊者』の尊称を得た。」（傍線筆者）に関し 2 冊の書物の依拠が考えられる。

一方は、前作『提婆達多』（新潮社初版）に付記された参考書一覧中の書物

(2) 中勸助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響 (木 内)

V.A.Smith の著書¹⁾ *Early History of India 3d.ed.* (Oxford University Press 1914 本稿では以後、*Early History* と略す)、他方は中勸助蔵書内に所蔵が認められる Stanley Lane-Poole の著作 *Mediaeval India under Mohammedan Rule* (T. Fisher Unwin Ltd.1917 本稿では以後、*Mediaeval India* と略す) である。

A few years later (A.D.997) the crown of Sabuktigin descended, after a short interval of dispute, to his son, the famous Sultan Mahmud, who made it the business of his life to harry the idolaters of India, and carry off their property to Gazni. (4) He in computed to have made no less than seventeen expeditions into India. (5) It was his custom to leave his capital in October, and then three month's steady marching brought him into the richest provinces of the interior. (*Early History* pp.382-383) (6) Between the year 1000 and 1026 he made at least sixteen distinct campaigns in India, (7) in which he ranged across the plain from the Indus to the Ganges. (*Mediaeval India* p.18) (両書の傍線筆者)

傍線部 (1) に関し、傍線部 (4) 及び (6) の和訳を利用した表現であることが分かる。マームードによるインド侵入最低回数が 16 回か 17 回かの両書における表現の違いは、「参考書は相当読んだけれど目的は小説で歴史ではないのだから結局自由な態度をとつた」という当時を顧みる中の言葉から、「十六七回」という表現に落ち着いたと思われる。

傍線部 (2) は傍線部 (5) の、傍線部 (3) は傍線部 (7) の和訳であることが認められる。

以上から、中は英文のインド史書を小説構想に利用したことが明らかとなった。

当時、中が通読した史書はインド史だけにとどまらず『提婆達多』(新潮社初版) 参考書一覧中には『ビガンデー氏 緬甸伝』が、中勸助蔵書内には『マハー・ワンザ (大史)』(マハー・ナーマン, 富山房, 1940)・Hermann Oldenberg 訳による *The Dipavamsa* (Williams and Norgate 1879) 等, ビルマやスリランカの史書・史詩が名を連ねる。

中の作品における文明観, 呪術と異類婚に代表される神話的要素, 人間性とは何かの問いに関し, 本論では「マハーヴァンサ」等スリランカ伝説の受容を巡って考察する。

3. 「マハーヴァンサ」等スリランカ伝説の受容

3.1. 大正期までの刊行状況

Mahāvamsa に関しては, ① Edward Upham による英訳 *The Sacred and Historical*

中勸助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響（木内） (3)

works of Ceylon (1833), ② George Turnour による巴利原文併記の英訳 *The Mahāvamsa, with the Translation subjoined and an introductory essay on Pali Buddhistical literature* (1837), ③ *The Mahāvamsa translation by L.C.Wijesinha* (1889), ④ ドイツ人学者 Wilhelm Geiger による *Mahāvamsa, English Translation* (1912) があった。

Dīpavamsa に関しては、⑤ Hermann Oldenberg による巴利原文併記の英訳 *The Dīpavamsa: an ancient Buddhist historical record*, 両書に関しては、⑥ ドイツ人学者 Wilhelm Geiger による英訳本 *Dīpavamsa und Mahāvamsa* (1908) を Ethel M. が更に英語に重訳した *The Dīpavamsa and Mahāvamsa* (1908) があった。

中と交流のあった宇井が「佛滅年代論」(『現代仏教』1924)で引用しているのは上記④⑤⑥であり、国内でも入手可能だったことが分かる。

日本語訳では、⑦ 釋宗演『錫嶮島志』(弘教書院 1890), ⑧ 荻原雲来・渡邊海旭等訳『摩訶洹婆』(東光社 1903) があった。

3.2. 中による錫蘭伝説の受容

『提婆達多』(新潮社初版)に付記された参考書一覧中の書物及び中勸助蔵書内に『解説西域記』(堀謙徳, 前川文栄閣, 1912)があり、同書中「大唐西域記 卷十一 第一節 僧伽羅国」pp.853-864に「マハーヴァンサ」同様のスリランカ建国の神話が掲載されている。また、上記⑤の Hermann Oldenberg の *The Dīpavamsa* (Williams and Norgate 1879) と「犬」創作後の出版年代だが『マハー・ワンザ (大史)』(富山房, 1940)が中勸助蔵書内に認められる。

The Dīpavamsa 受容の目的と時期に関して、1921年6月8日付和辻宛書簡内で当該書名を記載した後に「上記の本は一つはそれが読みたいからですが一つは今度書く愛育王の参考にもしたいのです。今注文しても六ヶ月とみて(此間丸善からさういつてよこしましたから Dīpavamsa を注文した時)十二月頃ではなくては手に入らないとすると、それから読みだして愈筆をとるのはいつの事か、随分じれつたい話です。(後略)」(傍線筆者)という一文がある。この箇所から、中は *The Dīpavamsa* を愛育王に関する未完の小説の構想のため、1921年6月頃に発注、1921年12月頃に入手したことが予測できる。この経緯から、「マハーヴァンサ」も *The Dīpavamsa* と同時期に受容したと考えるのが自然であろう。拙稿「中勸助と仏教童話」(『印度学仏教学研究』56巻2号 2008)にて既報の通り、中が独文並びに英文の資料を解したことから、宇井との交流を考慮すると「マハーヴァンサ」について上記④及び⑥の受容を予測できる。

(4) 中勸助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響（木内）

4. 「犬」のプロット上の特徴

4.1. 文明の衝突

作品冒頭には回教徒マームード軍の印度侵入に関し、偶像教徒への迫害、その財宝掠略、現地女性への性的暴力、城都市の破壊等暴力の数々が描かれる。作品のプロット上の転換点は、婆羅門による毘陀羅法を修してのヂエラル殺害場面である。「婆羅門の憤怒と苦行僧の嫉妬に燃えた」ことを直接的原因とするが、迫害を受けた宗教者としての、また同民族の女性を乱暴されたことに対する同民族男性としての反撃である。

ヂエラルの死を契機にしたマームードによるクサカの街の焼き討ち、即ち報復が描かれる。つまり現代の異民族間紛争にも繋がる憎しみと報復の連鎖という普遍的な文明衝突の様相が明らかにされた。

4.2. 神話的要素

婆羅門の呪法、毘陀羅法について、次のような会話が結末直前にある。

「彼奴はヂエラルといふた」

「え、あなたはそれは名ぢやないといつた」

「ふ、ふ、嘘ぢや。わしは彼奴の名を知つたばかりか現在彼奴を見た。彼奴は苦行をして居るわしのまへを通つてこの顔に唾を吐きかけをつた。おのしのいふたとほりの男ぢやつた。暫して森の中でヂエラル、ヂエラルと呼ぶ声をきいた。ヂエラルといふ名は邪教徒にあるのぢや」

対象に直接触れずにその対象を操作して行う象徴的呪法・調伏に関し、呪の対象者の名前を知ることが最低限必要なことは1921年9月21日付和辻宛書簡に登場する²⁾ Atharva-vedaの調伏法における「名前を捕えること、すなわち厳かに物を名付けること、もしくは単に<それは何々である>と知ることにより、その名付けられたものに対する魔術的力を獲得するのである」(針貝邦生、『ヴェーダからウパニシャッドへ』、清水書院、2000)という原理に基づくと考えられる。

作品に登場する主要人物の内、唯一、名前が明らかなのがヂエラルであることから、名前の持つ呪術的要素を際立たせる構想が作品に認められる。

また、人間の動物への変身譚その逆の変身譚が、呪術と神への祈りの結果に基づくことから魔術昔話の影響下にあると考えられる。

4.3. 人間性と獣性

「神意によつて結ばれたる夫婦の交わりは邪教徒の凌辱よりも遥に醜悪、残酷、

且つ狂暴であつた。」と描写される娘犬と僧犬との交わりは、夫婦という宗教的、道徳的に認められた関係性が、異教徒からの性的暴力より劣るという、逆説的価値観がクローズアップされる。作品冒頭で凌辱の様子を告白する娘に対して僧は「犬めが。」と罵倒するが、人間以下の存在としての「犬」に該当するのは、その直後、情欲の虜となり「さうぢや、わしはこれの姿をかへてしまはふ。ふびんぢやがしかたがない。わしらは畜生になつて添ひとげるまでぢや。」と考えた僧自身ではないかという問題提起がある。

娘犬については次のような心理描写がある。

僧犬との夫婦生活において「彼女は自分の肉体が僧犬の肉体の接触のために、自分の意志に反して性的な結果をひき起すのが情けなかつた。そしてそれが『あの人（筆者注 恋人）に対してしんからすまなかつた。」と、動物的本能と意志との狭間で苦しむ様が描かれた。子犬を亡くした際に「彼女は絶望した。精も根もつきてしまつた。その時その凄しい怒が忽然として深い深い悲と思慕の情にかはつた。」という娘犬の子犬を奪ったものへの怒りと子犬を悼む気持ちが記述された。人間的感覚、特に母性の内在が描かれた。

5. 「マハーヴァンサ」第6章「毘闍耶の来訪」、第7章の「毘闍耶の灌頂」との比較

上記4のプロット上の特徴を「マハーヴァンサ」第6章「毘闍耶の来訪」、第7章の「毘闍耶の灌頂」にも認めた。中の受容が想定される *Mahāvamsa, English Translation* (1912) の基となり、『南伝大蔵経』第60巻（大正新脩大蔵経刊行会1939大蔵出版）収録「大王統史」底本 W.Geiger 校訂の Pali Text Society 刊行羅馬字本該当部分を以下に示す。

5.1. 文明の衝突

Tassā sutvā tathā katvā sabbayakkhe aghātayi, sayam pi laddhaviṅṅayo yakkharājapasādhanaṃ. pasādhanehi sesehi tam tam bhaccam pasādhayi. Katipāham vasitvettha Tambapannim upāgami, (7,37-38)

5.2. 神話的要素—夜叉女の呪術について—

suttam ca tesam hatthesu laggetvā nabhasāgamā, dassesi sonirūpena paricārikayakkhini (7,9)

Tam gahetvā surungāyam ravantam yakkhinī khipi. Evam ekeaso tattha khipi satta satāni ca. (7,15)

(6) 中勸助の「犬」における「マハーヴァンサ」の影響 (木内)

Dāpitam Vijayenaggam yakkhi bhuñjiya piñitā solasavassikam rūpam māpayitvā manoharam (7,26)

5.3. 獣性と人間性

(1) 獅子王の妻子への愛情

Siho sīgham guham gantvā te adisvā tayo jane attito puttasokena na ca khādi na cāpivi. Dārake te gavesanto agā paccantagāmakam, ubbāsiyati so so ca, yam yam gāmam upeti so, (6,21 22)

So tam gantvā guhādvāram siham disvā va ārakā entam puttasinehena vijjhitem tam saram khipi. Saro nalātam āhacca mettacittena tassa tu kumārapādamūle va nivatto pati bhūmiyam. (6,28 29)

(2) 毘闍耶の悪行について

Vijayo visamācāro āsi tamparisā pi ca, sāhasāni anekāni dussahāni karimsu te. (6,39)

Vijayassa suto dhitā tassā yakkhiniyā ahu, rājakaññāgamam sutvā Vijayo āha yakkhinim : 》 gaccha dāni tuvam bhoti thapetvā puttake duve, manussā amanussehi bhāyanti hi sadā 《iti. (7,59 60)

6. まとめ

以上より、「犬」のプロット上の特徴である、侵略による文明の交錯、呪法による犬への変身等神話的要素、「犬」と蔑まれる対象が持つ人間的愛情と抑圧者の獣性、これらは中の「マハーヴァンサ」受容の影響と考えられる。

1) に示した論において堀部は「犬」における日本昔話「犬婿入り」の影響を指摘した。今回の調査過程において日本昔話の異類婚の原話型、即ち獅子と人間との婚姻譚、夜叉と人間との婚姻譚が「マハーヴァンサ」第6章・第7章に存在することを認めた。この経緯から、中の「犬」もインド源の異類婚譚の流れの中に位置づけることができよう。

1) 堀部功夫『『犬』考』（『銀の匙』考』、翰林書房、1993）において「犬」への *Early History of India 3d.ed.* の影響について指摘がある。2) William D. Whitney 解説 Charles R. Lanman 編集 *Atharva-veda Samhita, translated, Harvard Oriental Series Vol.VII・VIII* 1905 中勸助「犬」及び書簡の底本は岩波書店版『中勸助全集』による。

〈キーワード〉 中勸助, 「犬」, 「マハーヴァンサ」

(小田原女子短期大学准教授)